

じゅりみち

……仮設支援情報……



第52号 発行日 98.6.26
被災地NGO協働センター

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町7-2-6

TEL: 078-685-0068 / FAX: 078-685-0071

E-mail: SHB00846@niftyserve.or.jp

口座番号: 01180-6-68556 (郵便振替)

真夏のように晴れたかと思えば、これでもか!! とばかりに叩きつける大粒の雨。今年の梅雨は、なんだかとっても気まぐれ模様です。長崎の雨は有名だけど、神戸の雨ってどうなんだろう。



“まけないぞう”に

寄せられたメッセージから



「まけないぞう」の広がりにもなって、いろいろな方からお便りを頂きます。タオルを送って下さった方、ぞうさんを買って下さった方、遠いところから被災地を気にかけて下さる方、被災地の中から声をかけて下さる方……

一本のタオルとまけないぞうが、たくさんの人のさまざまな想いをのせて、今日もどこかを駆けめぐっています。そんな中から、横浜のある方のお便りを紹介したいと思います。

拝啓

先月電話で「まけないぞう」タオルを30本注文した者です。30本のタオルは無事手元にやってきて、ここ横浜でいろんな人の手に渡っているところです。

タオルと一緒に送られてきた「じゅりみち」の中で、「協働とは」という文にたいへん心を打たれ、お便りすることにしました。

私事ですが、あの日、伯母が東灘御影という所で被災者となりました。一人暮らしの老人というたいへん心細い立場ながら、様々な方々に助けられ導かれて、横浜に移り住み生活していましたが、今月どうしても生まれ育ったKOBEに帰りたいと、西区玉津町の県営住宅に引っ越しました。伯母の話の聞いたり、彼女やKOBEへの支援を考えた時、自分の無力さと同時に、世の中のボランティアの在り方について、どうしても納得がいきませんでした。すぐにでも飛んで行って、私にできることがあるのか？自分の生活を無視してやるべきことなのか？募金活動にも本当のところ、自分のお財布の一部を渡すことによって私の協力する気持ちが見せるのかと思うと、私の考える「支援」の意味とずれがあり、できませんでした。

新聞誌上でタオルの記事を目にしたとき、「これだ!」と感じたのです。

タオルを送られて、ぞうにして、それを商品として買うことができる。このつながりの中に一方的な募金等の協力とは違った、支援される側とする側の平等を感じました。

また「SOSを発信することのできるコミュニティの形成とSOSの発信に対して協働の作業により支え合うコミュニティ」（じゅりみち）ということには私にとってまさにKOBEへの支援とは別にとても重要な意味を持ちます。

私の住む横浜では社会的に弱者といわれる老人や障害者にとってこのようなコミュニティがないからです。この考えがKOBEから全国に広がることを願います。今、まけないぞうは震災に負けないばかりか、社会の中で生きづらい人々にとってのまけないぞうへと育ち初めている気がします。

長々と自分本位のお便りとなりましたが、続々と「まけないぞう」を知った友人たちからメッセージが集まっています。

後日、私たちからメッセージとして送りたいと思います。

どうぞこれからも頑張ってください。

(横浜市 矢島荘子さん)

私たちは大きなことはできません。

ただ小さな愛をもってやることはできます。(マザー・テレサの言葉より)

1998年度総会の報告 ~5月28日~

去る5月28日に、1998年度被災地NGO協働センター総会が開催されました。

<1998年度運営体制>

- ◎顧問 梁 勝則(阪神高齢者障害者支援ネットワーク)
- ◎代表 村井雅清(くるつぷ・えん)
- ◎事業部長
鈴木隆太
- ◎監事 有光るみ(プロジェクト2)
東条健司(週末ボランティア)
- ◎運営委員
内田喜恵(ファミリー神戸)
袖岡秀一(阪神大震災子どもを助ける会)
- ◎会計 福田和昭
- ◎スタッフ
細川裕子・矢島邦恵



今年度も
よろしく
お願いします

出席10団体、委任状23通(うち1通無効)。
冒頭で議長に内田さん(ファミリー神戸)を選出。

1. 1998年度事業方針・予算について
村井代表より3月28日に行われた臨時総会で承認されていることが報告、確認されました。
2. 1997年度事業報告案・決算案について
鈴木事業部長より事業報告案、福田(会計担当)より決算案の説明がなされ、有光監事より監査報告がなされました。
◎賛成22 反対・棄権0 ~承認されました
3. 1998年度運営体制案について
3月28日の臨時総会で承認された、顧問・代表・事業部長・監事の確認が行われ、下記2名が運営委員に推薦されました。
内田喜恵(ファミリー神戸)
袖岡秀一(阪神大震災子どもを助ける会)
◎賛成22 反対・棄権0 ~承認されました

なお承認された、1997年度事業報告・決算の詳細については、センターまでお問い合わせ下さい。

悲しき復興住宅 孤独死 自殺すでに7人 ~住民ら「訪問活動充実を」~

阪神大震災で住まいを失った被災者の「終の住み家」となる災害復興公営住宅で4月以降、だれにも看取られずに死亡する孤独死や自殺が相次いでいる。兵庫県警が発表したケースだけでも7人(5月末日現在)に上り、住民らは不安を募らせる。孤独死、自殺者が200人を超えた仮設住宅同様、深刻な社会問題となつてきており、行政側の対応を求める声が上がっている。

~中略~

復興住宅での要支援者対策として、兵庫県と神戸市では、安否確認などに当たる生活支援員を派遣する「シルバーハウジング(高齢者世話付住宅)」を約1390戸建設。さらに市独自に、一人暮らしの高齢、障害者を対象に「高齢者世帯支援員」を原則週1回戸別訪問▽高齢、障害者でなくても、1DK、2DKの住宅(約6300戸)に緊急通報システムを配備——など住宅と福祉の連携策を実施し、全国の自治体から注目を集めたが、設備の充実だけでは限界があることを示している。

(6月4日 毎日新聞夕刊)

仮設住宅入居、ピークの1/3 ~兵庫県まとめ~

兵庫県は9日、阪神大震災の被災者向け仮設住宅の今月1日現在の入居状況をまとめた。入居世帯数は1万5655世帯で、5月は2506世帯減り、1995年11月のピーク時(4万6617世帯)の約34%になった。

今春、災害復興公営住宅の完成などにもとない転出世帯が増え、3月に1661世帯、4月に過去最多の3310世帯が転出している。また、5月に淡路島津名郡津名町の仮設住宅から3世帯が転出し、同町の仮設住宅入居世帯は0になった。最も多い神戸市の入居世帯数は、1万1716世帯。

(6月10日 朝日新聞朝刊)



……仮設支援情報……

「最近はやっと一段落ついてきたね……」とは、引越サービスをしているグループのボランティアの弁。3月末からフル回転でトラックで被災地を駆け回っていた彼は、「その人の部屋を見ただけで、どんな暮らしをしてきたかわかる」という。ようやく新しい住み家に入ることが出来たのに、でもそこで命を絶つ人が少なくない。昨年一年間で、日本国内で自殺した人は24,391人に上るといふ(警察庁調べ)。平均22分に一人が命を絶っている計算だ。これだけ多くの人たちが生きる希望を失わなければならないこの世の中って、いったい何なんだろって思う。

不申 戸 業 新 屋 県

【新聞定価 1カ月325円(内消費税187円)・1部発刊期刊110円夕刊50円】

【第3種郵便物認可】



復興公営住宅に移ったが、神戸市内

仮設、ぬくもり、おおきに。

念願の転居…埋まらぬ心

仮設から復興住宅などへの引っ越しがピークとなっている。一方で、「こまごま頑張ってきた被災者の一四年目の死が後を絶たない。その背景を追った。

になりやすく、「荷下しうつ病」ともいわれると分析する。仮設からの転居という転機に、被災者たちは突然、虚脱感に襲われたのだろうか。

加藤医師は「寂しいのはだれにでも起こり得る問題で、恥ずかしいことではない」として、こう呼びかける。「高齢者が引っ越しをした後、周囲になじむのは体力も気力も必要で、時間がかかる。ゴールではなく、スタートだと思っ、決して焦らないでほしい」

復興住宅の六階から、別の八十一歳の男性が飛び降りた。五月には、神戸市灘区で六十八歳の女性、同市灘区で五十歳の男性が同じ末路をたどった。

東灘区の女性も昨年十一月に夫婦で復興住宅に入居後、夫が亡くなり、「寂しい」と漏らしていた。上着のポケットには「主人のところへ行きます」などのメモが残されていた。

相次ぐ悲劇。兵庫県精神保健協会(このケアセンター)の加藤寛精神科医は「一般に、引っ越しをした人や娘を嫁がせた父親、昇進を遂げたサラリーマンらが、目標を達成させたのに理想と違う場合、うつ状態

は精密機械の故障だったと声をかけたら、「散歩にいた。しかし、入院する日が、病状の悪化で退職し、来し」と答えた。いま思の朝、初めて支援員が常駐同じ仮設の住民と「こーい」えは復興住宅で寂しくて、する相談室にやってきました。「眠れへん。何も食べらな。もつと話をしてくださるやろ」と友人は振り返る。男「いえない寂しそうな表情で、「おかわり飲んであげようか」と勧めた。入院直前は少し元気になった気がして、生活復興相談員らの訪問を受けていた。口数が少なく、支援員も声を詰まらせた。

終の住み処

4年目の死

「おおきに」四月、尼崎市内の災害復興公営住宅。高齢世帯向けのシルバーハウジングに住む男性はこぼ見送ってくれた生活支援員に礼を言い、タクシーに乗り込んだ。支援員はその最後に聞いた言葉が印象に残ったという。男性の手は紙袋が二つ。前立腺がんの病気が悪化し、入院することになった。が、わずか二日後に病院を抜け出し、戻ってきた。そして、自室のある九階のベランダから飛び降りた。一人暮らし。市内の仮設住宅から移って十九日目だった。

男性は今年二月ごろまで「おおきに」は精密機械の故障だったと声をかけたら、「散歩にいた。しかし、入院する日が、病状の悪化で退職し、来し」と答えた。いま思の朝、初めて支援員が常駐同じ仮設の住民と「こーい」えは復興住宅で寂しくて、する相談室にやってきました。「眠れへん。何も食べらな。もつと話をしてくださるやろ」と友人は振り返る。男「いえない寂しそうな表情で、「おかわり飲んであげようか」と勧めた。入院直前は少し元気になった気がして、生活復興相談員らの訪問を受けていた。口数が少なく、支援員も声を詰まらせた。

「病院に行くんか？」とほおりませんと答えて、その死から六日後、同じ

(6月13日 神戸新聞朝刊)

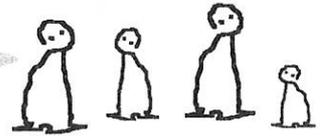
恒久住宅で無職男性死亡

六甲アイランド 十二日午前十時半ごろ、神戸市東灘区向洋町、六甲アイランドの公営復興住宅「ウェストコート九番街」で、無職の男性が自宅で死亡しているのを、管理人が通報を受けた神戸水上支援員が見つけた。同僚は、死後約二日後病

死とみている。調べによると、男性は昨年末に六甲アイランドの仮設住宅から転居し、一人暮らしだった。この復興住宅では、同市職員や保健婦らが連携してほぼ週に一度のペースで安否確認に訪れていたほか、五月には、自治会ボランティア団体が倉庫で、住民にラジオ体操への参加を呼びかける活動を始め、同



公的支援を考える



5月15日、衆院での「被災者生活再建支援法」によって、事実上、2年間に及んだ公的支援制度は一段落した。しかし、これで運動が終わったわけではない。今後は、この「生活再建支援法」のより充実した配備を目指すために、運動を展開していかなければ行けない。

震災から3年半を経た阪神・淡路では、すでに現金の一時金支給ではくらし再建が困難な状況が山積みしている。ソフト・ハードにわたる多岐・多様な支援施策によって個別状況に応じた支援が求められている。そのために、被災地では「行政措置」の具体化はもちろん、上乘せ支援、一時金支給以外のモノ、ソフトのきめ細かい支援策の実現は「阪神淡路復興基金」の運用にかかっている。

今後、どのような対象にどのような施策が必要なのかを、震災4年目の現状と合わせて整理・検証し、具体的に提案、実現を図っていくことが必要である。

(被災地NGO協働センター 鈴木隆太)

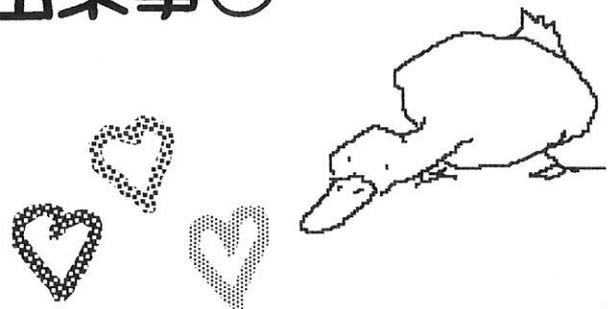


○ある日の出来事○

在宅訪問をしているHさんに誘われて、居酒屋へ行ったある日の出来事です。Hさんは、足に障害を持ち車椅子生活を送っています。けれど、彼はその障害を積極的に受け入れ毎日を過ごしています。

彼は高校時代、野球部でその時飛んできたバットで足を強打し、その影響で50代になってから足の自由を奪われたそうです。

その日は、悪ガキと一緒に連れていくなかれ、お店に来ました。誰が見てもお孫さんのような会話をしていました。「そんなに甘やかしているのですか？」と言う私の問に対して彼は、「いいんだよ、あいつは素直だからな。それに俺みたいな年寄りのところへ若い人たちが大勢来てくれることは、とてもうれしい」と応えてくれました。

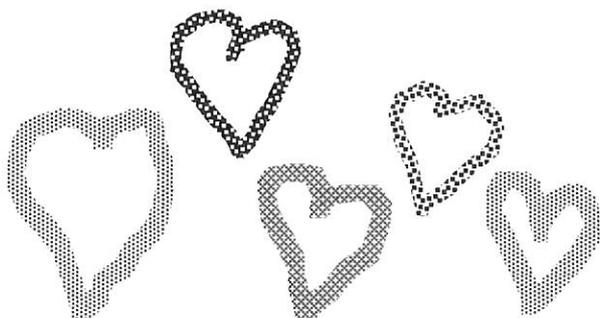


た。また、「ボランティアの人たちも私が障害を持っているから来てくれる。普通だったらこんなに若い人と接することはできないから、私は障害を持ったことを感謝する。」とまで言っていました。隣にいたお客さんに対して「この人たちは、私の友達です。」と紹介してくれました。

それを聞いた常連のお客さんは、「俺はいろんなところで飲んでいるけど、車椅子で飲みに来ている人は初めて会った。一般的に障害者は障害をひけめに感じうちにかもってしまい、こんなに普通に話ができうれしい。」と話していました。

彼は障害をもっている、それをひけめにも思わず、それどころか障害をもったことを誇りに思い前向きに生きているのです。私たちにとって人生の大先輩が私たちに対して「友達です」と紹介してくれたこと、とてもうれしく思いました。

(被災地NGO協働センター 増島智子)



震災がつなぐ全国ネットワーク



阪神・淡路大震災の発生から4年目。震災を機に注目を集めたボランティア活動も、被災地内外で様々な拡がりを見てきました。震災での経験や、各々のグループの特徴、つながりを活かした活動を探っていこう。そんな思いから'96年の秋より全国各地のグループが集まって準備会を重ね、昨年11月、いよいよ「震災がつなぐ全国ネットワーク」を旗揚げしました。

5月30・31日の2日間、名古屋でこの「震災がつなぐ全国ネットワーク」の全体会議が行われました。北は東北・福島から、南は九州・福岡まで、全国各地から12団体、個人参加を含め40名が集まりました。

「物資が来たぞう!! 考えたぞう!!」は好評だったぞう!!



「震災がつなぐ全国ネットワーク」の初仕事として、今年1月、KOBEの検証シリーズ①「物資が来たぞう!! 考えたぞう!!」を発売しました。新聞などにも取り上げられて、初版の3,000部はめでたく完売、好調な売れ行きだったことが報告されました。

この「物資が来たぞう!! 考えたぞう!!」は、愛知の「震災がつなぐボランティアネットの会」が中心となり、全国からアンケートを集めたり、被災地にインタビュー取材に来たり、はたまた全国ネットワークの参加者と討議をしたり……といった協働作業の中から生まれたもの。

より多くの方々に読んで頂けるよう、各団体が努力していくことが申し合われました。ちなみに「物資が来たぞう!! 考えたぞう!!」はA4版64ページで、一冊500円。被災地NGO協働センターでも取り扱っています。

「ボランティア編」の編集も進んできたぞう!!

KOBEの検証シリーズの第2弾は、「人」「モノ」「金」「情報」のうち、「人(ボランティア)」をテーマに編集作業が進められています。編集は「とちぎボランティア情報ネットワーク」「ハートネットふくしま」「SVA(曹洞宗国際ボランティア会)」を中心に進んでいます。各人とも今後一層協力していくことが確認されました。

5月30日の夜は、上記3団体の間で練られた原案が配布され、参加者全員で内容を討議しました。

それぞれが被災地・後方支援での活動経験があるだけに、熱い意見が飛び交いました。震災当時を思い返して、苦い経験を思い出したり、ホロリとしたできごとが思い浮かんだり……

「物資が来たぞう!! 考えたぞう!!」に負けないものが出来そうな予感です。「ボランティア編」は来年1月17日の発行予定。みなさんお楽しみに!!

キーワードは「つなぐ」

- (1)国内での災害時において、このネットワークが活かされた支援活動を行います。
- (2)海外での災害時において、このネットワークが活かされた支援活動を行います。
- (3)阪神・淡路大震災被災地への支援活動を継続するために、このネットワークを活用します。

昨年11月に「震災がつなぐ全国ネットワーク」が発足した際に、このネットワークの目的として上の3つが挙げられました。

ほな、実際どないしていかか……ということで、参加者から様々な意見が述べられました。

「団体だけでなく、個人も参加できるような気軽なゆるやかなネットワークにしたい」

「やっぱり基本は顔と顔の見える関係だよな」

「地域の小さな団体などにもつながる情報の交差点でありたい」

「そんなこんなを活かしながら、緊急時にすぐに対応できる仕組みを提案したい」

考えてみると、みんなに共通しているのは、「草の根のつながり」を大切にしたいということ。この思いを大切にしながら、仲間の輪を広げていこうということが了承されました。

具体的には、リーフレットで参加を呼びかけたり、ニュースレターを発行したり、全国キャラバンであちこち飛び回ったり、なんてことを考えています。

震災をきっかけにつなぐた全国の人と人。みなさんと一緒に、より多くのつながりをつくってあげたいと考えています。



市民が市民活動を支える社会に

～入会とカンパのお願い～

被災地NGO協働センターは、現在、被災地内外の73団体・個人の参加によって活動しています(賛助会員含む)。

これまで協働センターでは、全国の支援者より頂いた寄付金や、各財団・企業からの助成金を、活動資金の主な財源としてきました。しかし支援活動が長期化する一方で、震災への関心は薄れつつあり、被災地支援を目的とした寄付や助成は、今後次第に少なくなる事が予想されます。

仮設住宅の高齢社会、孤独な生と死、生活再建の前に横たわる高齢者・子ども・女性・外国人の問題、住みよいまちと地域コミュニティ……震災後の被災地で見えてきた様々な課題は、実は日本のあちこちに見られる普遍的な課題でもありました。

これらの課題を解決するには、行政や企業が対応するのみでなく、私たち市民の一人一人の取り組みが必要なのはいうまでもありません。震災後とくにNGO/NPOやボランティア活動への関心が高まってきましたが、残念ながらこうした社会的課題に取り組む市民活動への支援体制は、まだまだ整備されていないのが実情です。



これまで日本では、市民活動を支える寄付が、社会の中でなかなか認知されてきませんでした。

市民活動は市民の参加によって支えられています。それだけでは活動は成り立ちません。活動を支える資金の支援があつて、はじめて安定した責任ある社会の担い手としての活動が可能になります。

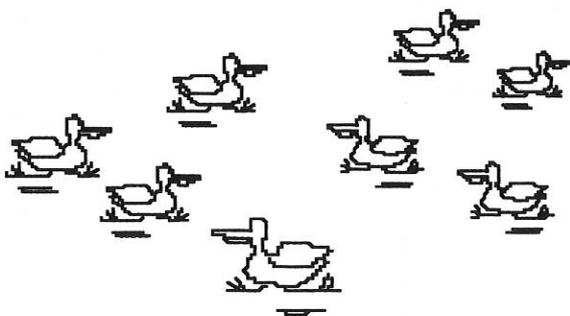
もちろんNGO/NPOやボランティアも自助努力は必要です。協働センターでは、生きがい就労事業の一環として行っている「まけないぞう」事業を収益事業として確立させることを目指しているほか、会計処理にコンピュータを導入するなど、会計の透明性をより一層高める努力をしています。

協働センターでは一昨年度より会則を整備し、支援活動を行っている個人・団体のみならずセンターへの入会を呼びかけています。これは地域と共に活動していく上での協力者を得ると共に、センターの運営に必要な資金を会費収入によって安定的に確保していくという目的があります。

震災直後より様々な形で続いている支援活動も、この7月で3年半を迎えます。今後の活動の継続には、支援者のみなさまの力がますます大切になってきます。

市民が主役の復興を目指して、市民が主役の世の中を目指して、一緒にこれからの協働センターをつくっていきませんか？

(この紙面の裏側が入会申込用紙になっています。問い合わせはセンター事務所までお気軽にどうぞ)



センターの動き 5月末～6月

- | | |
|-------------------------------------|---|
| 5/24(日) フェスタin湊川/ぞう販売(神戸・湊川公園) | 6/11(木) センター会議 |
| 5/25(月) サロン・ド・NGO(地元NGO) | 6/12(金) 村井くん、わんぱく広場(大阪・高槻)で講演 |
| 5/27(水) センター会議 | 6/14(日) 結ぶワークショップ参加(神戸・HACF) |
| 5/28(木) センター会議/総会 | 6/16(火) NPOセミナー参加(大阪) |
| 5/29(金) 北朝鮮支援実行委員会 | 6/17(木) センター会議 |
| 5/30(土)～31(日) 震災がつなぐ全国ネットワーク会議(名古屋) | 6/18(金) HACFワークショップ参加(神戸・HACF) |
| 6/ 3(火) 村井くんインタビューNHKラジオ中継 | 6/23(火) 市民活動広場NPO相談会(神戸・フェニックスプラザ) |
| 6/ 4(木) センター会議 | 6/25(木) センター会議 |
| 6/ 5(金) 金山町社協(福島県)研修受け入れ
尼崎裁判傍聴 | 6/26(金) じやりみち52号発行
～29(月) 福井地震50周年記念イベント(福井) |
| 6/ 9(火) センターサロン | 6/28(日) エイドの会フリートーク参加(神戸・中央区) |

ぞう 通信。

発行所：神戸市中央区東川崎町7-2-6〒650-0044
被災地NGO協働センター

第5号 1998. 6. 26



♥おかげさまで第5号！！♥

「まけないぞう」「一本のタオル運動」を始め、もうすぐ一年を迎えようとしています。そんな中、なんと2万7千本の「まけないぞう」が全国に愛を運んでいます。一年目の記念すべき誕生日に3万本達成する事を願っています。

そして、今回もまたハートフルなお便りが届きましたので、ご紹介させていただきます。



実は



何になるのかな

♥支援して下さった同級生に何か
お礼がしたい。♥
大阪在住Tさん

120本買った者です。早速送って下さって有り難う。

私は灘区岩屋で被災し、その後大に住んでいます。もともと秋田県生まれで、東京を経て神戸に住んでいました。長田区の板宿に住んでいたこともあります。震災で全国に散らばっている同級生に助けられとても感謝しているのですが、どんあふうにお礼をお返しすればいいのかこの3年間悩んでいました。

そんなとき新聞で「まけないぞう」のことを知り、「これだ!」と思い120本購入しました。お世話になった同級生に「私も元気でがんばっているぞう」と書いて、「まけないぞう」タオルをおくります。

私は大阪でいい人に出会い、いま寮母として働いています。皆さんもがんばって下さい。

♥Tさんの気持ちを受け取った
恩師の先生がこんなお手紙を
届けてくれました♥

「まけないぞう」の手ふきどうもありがとう。

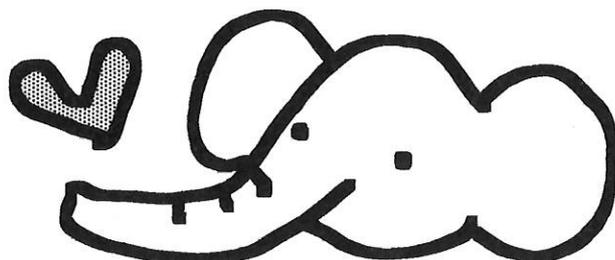
いろいろ頑張っているんですね。被害を受けた人は本当に大変なんですね。

私などは年のせいで腰が曲がり、目がみえなくなり、耳も不自由でも住む家があり、食べ物も不自由なく暮らしていますので、被災した人たちの苦しみがどんなものかはなかなかわかりません。

自分が本当に味わった人でなければ想像だけのものにすぎませんものね。

身体をこわさぬよう頑張ってください。はゆう気があるぞう。こうべのみなさん負けずにがんばれ。ぼくたちがあつめたタオルでつくってください。タオルでかわいいぞうをいっぱい作って、がんばってください。昔、Tさんが秋田で38年前の中学で国語を受け持って下さった先生から。。

応援メッセージありがとうございます！

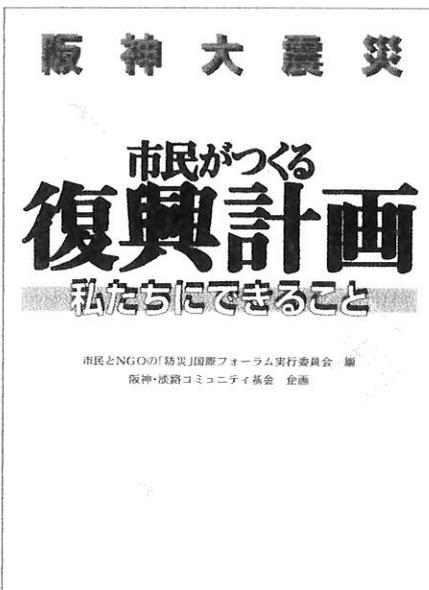


いま まちは復興しているのか もう一度問いかけよう

阪神大震災

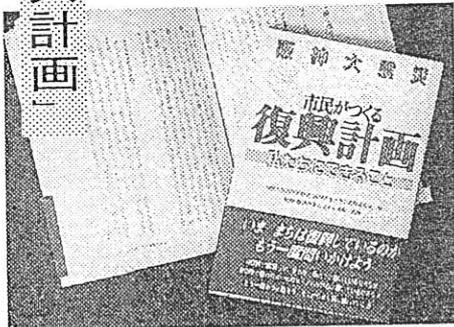
市民が つくる 復興計画

私たちにできること



阪神大震災の被災地で活動するボランティア団体、医師会などの代表でつくる「市民とNGOの『防災』国際フォーラム実行委員会」（委員長、岸田健太郎・神戸大学大学院教授）は22日、被災者の声を基にまとめた「市民がつくる復興計画——私たちにできること」の写真を出版した。市民同士が支え合う「暮らしの再建」をメインテーマにして、ハード面を重視する行政側の復興計画への提言になっている。

市民がつくる「復興計画」



被災者の声を基に 来月販売

のほか、医療・福祉についての「やすらぎのある暮らし」など五つの柱で構成。医・職・住など総合的な復興計画になっている。
同実行委は、この計画をたき台に、東京や静岡など約40カ所でシンポジウムを開き、市民が参加した防災・まちづくりを考える。246円で定価1000円（消費税別）。1万部発行。来月10日ごろから兵庫県内の主な書店で販売する。問い合わせは同実行委（078-685-0068）。

【渡辺 暖】

いま まちは復興しているのか
もう一度問いかけよう

20秒で崩壊しないまちを 私たちは築いているだろうか
20秒で奪われないものを どれだけ心に築いているだろうか
もう一度見つめ直そう そこからまた共に歩いていこう

編者・発行：市民とNGOの「防災」国際フォーラム
企画：阪神・淡路コミュニティ基金
発売：神戸新聞総合出版センター

¥1,000+税

問い合わせ：市民とNGOの「防災」国際フォーラム事務局（被災地NGO協働センター内）
TEL 078-685-0068 FAX 078-685-0071

（六月二十三日 毎日新聞）